

明治34年（1901年）開校の旧制第七高等学校造士館にルーツを持つ鹿児島大学理学部ですが、百年を超えるその歩みの中で新制大学へと移り変わり、昭和40年（1965年）の理学部創設、平成16年（2004年）の国立大学法人化を経て今日を迎えます。教育機関の置かれ方の変遷は、いつの時代においても、その教育効果をより良い社会の実現へ結びつけたいと願った先人たちの思いの発現ではないかと思えます。その流れは普遍的なものであり、近年も社会における大学の在りようはたびたび議論され、学生と向き合う現場でも様々な模索が続くのを肌身で感じています。ここ10年程で見られるようになった、とても現代的な活動の一つに、市民に対する研究現場の公開が挙げられるでしょう。本稿ではその一例としての催しを紹介します。

筆者が属する鹿児島大学理学部物理科学科宇宙コースは電波と赤外線による観測天文学が盛んです。平成13年（2001年）に国立天文台 VERA プロジェクトの直径20メートル電波望遠鏡が農学部入来牧場内に建設され、私たちが暮らす天の川銀河の立体地図作りを目標にした研究が始まりました。地球の公転が星の運行に投影されることによる見かけの動き（年周視差）を精密に計測することで、従来にない高い精度で星の距離を測定することができ、研究は今も続いています。その現場を学生と教員が共に市民向けに紹介する場としての催し「八重山高原星物語」も始まりました。薩摩川内市、鹿児島大学理学部などの多くの共催によるこの催しは毎年8月の中旬に開催されます。人里離れた山間部にも関わらず、この日の観測所は多くの人で賑わいます。催しの目玉は高さ23メートルの電波望遠鏡へ上る見学ツアーで、アンテナの上からは西に川内川と東シナ海、東には錦江湾奥部の隼人周辺を望むことができます。理学部を中心とする学生たちは、多くの大人や子供たちに天文学の新たな知見や自身の研究について生き生きと語ることができます。また、同時に学生たちは周囲と子供たちの眼差しから、研究の枠を超えた幅広いことも感じ取っています。

鹿児島大学同窓会の皆様方、新しい元号となる2019年の8月、どうぞ入来観測局へおいで下さい。現在の大学の雰囲気的一端を感じていただくと幸いです。涼しい入来の高原で学生と共にお待ちしております。



写真上：国立天文台 VERA 入来観測所と鹿児島大学1m光赤外線望遠鏡ドーム

写真左：学生の話に聞き入る子供たち

写真右：理学部を中心とした学生たちと筆者（左端）